コケゴッゴー

二　瓶　直　子

1992年7月，日本住血吸虫症の撲滅活動の一環として，フィリピンのレイテ島・ボホール島の流行地を調査した。両島とも地形図・地質図が入手でき，先学の貴重な調査結果と両国の緊密な協力関係のお陰で，電話もなく，上水道も完備していない地域でありながら，車の手配も人的協力もスムースで，調査は最高の条件で行われたと思う。

レイテ島での流行地は脊梁山地の北東に広がる平野に限られている。レイテ激戦の舞台となったところで，日米の多数の兵士が本症に罹った。この地域は日本の流行地と類似した地形条件にあり，ミヤイリガイ（日本での本症の中間宿主貝）が未だに生息する甲府盆地の御勅使川扇状地と似た扇状地上位面にも，患者が発生しているとのことで，山麓の村を訪ねた。水田のある集落は裕福で，部落長も好意的に貝の生息地に案内してくれた。滔々と湧きでる泉に涵養される地域が流行地であった。連続する地形面で貝のいない隣の集落を訪ねたいと言ったら，自ら案内するという。まずは部落長に挨拶し記念撮影し，一応の儀式が終わった後，集落自慢の水道の水源を案内して下さるという。我々の5人乗りの車に，部落長・その父・子供も加わり8人が乗り，歩行に適した扇状地礫を敷きつめた急勾配の道を走った。土地の人にとって車は珍しく“ドライブ”かもしれないが，難行苦行の視察だった。マニラより遠い日本からの，キャラバンシューズに計器を身につけた女の研究者を車で案内したなどは，きっとニュースの少ない彼らにとって1カ月は話の種となったのであろう。後でゲリラのこもる集落で，隣集落長がいなければ危険で，政府職員は近寄りがたいことを知った同行のT先生は青くなった。こちらにとっても話の種になった。昼食は市場のスタンドに並べられた10数個のお鍋の中から，フィリピン風豚角のケチャップ煮，ヤキソバ，チャーハン等を選んで皿に盛り，スタンドの奥の誰がいるか判らない暗闇のテーブルで食べた。かつて遺骨収集団訪問時は，何の肉か分からぬドロドロの料理であったということから推測すると，大分経済状態は良くなったのであろう。

ボホール島の経済状態はレイテ島より悪いが，フィリピンの平均的レベルにあるという。島の面積の半分以上は隆起珊瑚礁である。世界の七不思議といわれる，お碗を逆さにしたような丸い小丘（haycock，土地の人々はチョコレートヒルと呼ぶ）が，数百となく並ぶ。日本のテレビ番組でも紹介されたことがあるが，なかなか壮観である。その内の一つ標高390mの頂上にある展望台で，地図を広げブラントンコンパスとレベルで地形面の対比を行った。景観を調査できる地理学の妙味を味わった。もっとも有病地はこのような上位段丘面上のカワニナのいる水田にはなく，島の北部の標高10～30mの波状起伏のある段丘面の中の谷床にある。その中でも水田・養魚池・パラワン地域に限られている。タロイモに似たパラワンの根は飢饉時の非常食である。天水田で降水に恵まれないこの島の主食生産の場は，住血吸虫中間宿主貝の生息地で感染の場でもある。段丘面の大部分では家畜が飼われ，ほとんどの土地が利用されている印象をもつ。海辺のやせた隆起珊瑚礁では山羊が，内陸側では牛・水牛（カラバオ）が，家の周りには犬と見間違う痩せた豚，種々な色・声の鶏，ひょっとしたら病気（住血吸虫・狂犬病）の犬もいる。街中の家でも鶏や豚，多数の犬を大切に飼っている。これも非常時のためとも聞く。朝一番に起きるのはコケゴッゴー↘と下さがりに鳴く寝呆け鶏。陽がさし始めるとコケコッコー↗。そして子供達の仕事である豚小屋の掃除がさっさ，さっさとリズミカルに始まり，ぶーぶーぶーぶーと賑やかなこと。夜中の数時間しか出ない水道の水で夜中に水浴びしたり飲料水を取りに行ったりで，子供達もなかなか忙しい。自分の育った頃のかすかな記憶にある世界で，何となくなつかしく，日本も同じ農耕民族だったと親しみを憶えた。しかし今鶏の声を聴くにつけ，寝呆け鶏を思い出し、早くこの国に日本住血吸虫症のない安全な農業生産の場を確立したいと思う。